雑　録

ヨーロッパの大学をまわって

——多国籍企業・外国貿易・国民経済そして街角——

関　下　　稔

私は1＋1＝2だと思うが,
ところで貴殿のお考えはどうか？
　—イギリスでよくいわれるジョーク

(一)

私は去る2月24日より約一ヶ月間,本学の奨学寄付金により,ヨーロッパの大学,研究機関をまわって，私の専門分野である多国籍企業，外国貿易ならびに国際経済に関する資料収集，情報交換，それに各地の研究者との若干の意見交換を行なう機会に恵まれた。

早春の息吹を感じさせる2月24日夜半,成田空港を飛びたった飛行機は,14時間後,最初の経由地ブラッセル空港が悪天候のため西ドイツのケルンに臨時着陸した。2時間ほど待ったが天候回復の見通しがたたないため，急拠バスに乗換えてブラッセルまで行き，そこで乗継いで，最初の目的地ロンドンに到着したのは予定から大幅に遅れた夕方の5時過ぎであった。黄昏迫るロンドンの街を，ホテルに向うバスの中から眺めながら,「やれやれ」と安堵の胸をなでおろすと同時に，これからもっと大きなアクシデントに遭遇するのではないかという不安がちょっぴり胸をかすめた。ともかく私のヨーロッパ訪問は最初から波乱含みであった。

私が最初に訪問したのは，ロンドン西方50キロの地にあるUniversity of Readingの John H. Dunning 教授のところである。この大学は駅前からバスで10分くらいのところの閑静な住宅街の一角にあり，一面にグリーンを敷きつめたキャンパスを7～8分歩くと，各学部の校舎と研究施設が集まっているところにでる。教授の所属するFaculty of Letters and Social Sciencesはその一番手前にあり，図書館を併設した研究棟の四階の東端に教授のオフィスがあった。

Dunning 教授は，周知の通り対外投資，多国籍企業に関するイギリスの著名な研究者であるばかりでなく，国際的にもよく知られた学者であるが，我々は教授の手堅い実証的な手法から多くのものを学んできた。私自身も，本年度のゼミナールで The Determinants of International Production という教授の論文を輪読したので，そのことを話すと "thank you" といいながら，大分の著作目録をさしだしてくれた。それをみて改めて教授の多作ぶりに驚いた次第である。教授は一見して教養ある英国紳士とわかる，中年の，スマートな，身だしなみのいい，温和な人で，図書館に案内してもらい，図書利用に関する便宜をはかってもらったうえ，約一時間ほど専門の多国籍企業の問題について話し合った。

そのなかで教授が強調した点は，第一に先進国間の対外直接投資の相互浸透 (cross-penetration) 現象は今後一層深まるだろう，ということである。対外直接投資が増大する要因は色々あって，けっしてひとつだけではないが，なかでも巨大企業が工場立地上の観点から資源の最適配分をはかるために，こぞって工場を海外に移転させる傾向があり，今後この傾向はますます強まる見込みである。しかも，これは先進諸国の共通の傾向であり，したがって対外直接投資は先進諸国の共通の現象として今後ますます拡大し，それ故相互浸透が増大する。このように，主として企業の立地論 (location theory) 的アプローチから先進諸国間の資本の相互浸透を説明していた。

第二に，このなかでアメリカの影響力は徐々に低下していき，それとは反対に欧，日のそれが増大していって，世界的な相互投資の時代が到来する。

以上の二点についてはわが国でも多くの論争のあるところであり，教授の指摘するように，先進諸国間の相互投資の増大とそのなかでのアメリカの影響力の低下を主張する論者と，それとは反対に世界的な階層構造の成立とアメリカの支配の増大を主張する論者があることを私が述べたのにたいし，教授はひとつにはアメリカの政治的，経済的影響力の低下が生じ，他方で先進国内の巨大企業がこぞって工場の海外立地を進め，したがって対外直接投資が増大する以上，相互浸透現象が強まる，と再度強調した。

第三に，上の二点に関連してアメリカの多国籍企業（製造業）が海外進出を行なうにあたって，生産構造の世界的な配置，つまり企業内世界分業の確立を行なっていること，——こうした多国籍企業の生産統合について質問したところ，それはその通りであり，イギリスに進出してきているアメリカ企業の場合もそうしたことがいえると述べた。またヨーロッパの多国籍企業が海外進出する際にも同様の方法を

利用していると述べた。そこで私が，わが国の巨大企業（製造業）の場合，国内に広範な中小下請加工部門を有し，また賃金の安い婦女子労働を多く使用できるため，なかなか海外に進出しようとしない傾向があること（たとえば自動車，電子など），また進出する場合でも，international subcontracting ともいうべき何重かの階層系列をもとうとすること（たとえば，日本の資本が韓国の労働とジョイントになって L.D.C.，たとえばイランや東南アジアに進出して，現地労働力を利用しているケースで，その際日本人労働者が最上層，韓国人労働者が中間層，現地人労働者が最下層を，それぞれ構成している）を指摘した。この点については，教授はそれを日本の特殊性として認め，ヨーロッパ企業の場合にはそうした例はほとんどないと述べた。ただしアイルランドの場合には若干そうしたケースがあるが，これはイギリスとアイルランドとの間の特殊な歴史的結合関係からくるものであると述べた。ただ一般的に，低賃金労働力を利用するためにヨーロッパ内の相対的に賃金の低い地域（スペイン，ギリシャ，それにイタリアの一部）に生産拠点を移動させることはよくあることだと指摘していた。

第四に，理論上の問題として貿易と投資との関係をどう把握するか，とりわけプロダクトサイクル論の当否や，対外直接投資を説明する理論としてはどれが最も有効か，などの諸点については，これは新しい現象であり，そのため有効な理論を作りあげるために目下模索中であること，またそのなかでは産業組織論的アプローチが比較的有効であるとの年来の主張を繰返していた。

第五に，L.D.C. に進出する多国籍企業については，さきの international subcontracting のようなケースがイギリスの場合もあるが，——かつての植民地時代からの特殊な結合がまだ部分的に残っているので——しかし全体的には多くの比重を占めていないし，また今後，多国籍企業が世界的な市民権を得るためには受入国側との摩擦を避け，合意を得なければならず，受入国政府の規制も一層厳しくなることが予想されるので，かつてのような「植民地主義」的な態度はとれなくなると述べた。

最後に，目下の研究課題は先進諸国間の相互投資に関する実証研究であり，その成果の発表のため近々訪日する予定であることを話された。そして自分の考えの詳細はここに書いてあるからといって，数冊のペーパーを渡された。宿に帰って早速目を通したところ，そのひとつ Future of the Multinational Enterprise (Lloyds Bank Review, July 1974, No. 113) のなかで，対外投資の歴史を概観して，第一次大戦までの証券投資と労働力の移動を主とする第一期，第二次大戦後～70 年代まで

の対外直接投資（多国籍企業）を主とする第二期にたいして，来るべき80年代の第三期は知識 (knowledge)，資本 (loan capital)，技能 (humanskills) の三者がパッケージになったサービスの輸出が増大する multinational consultancy firm or agency の時代が到来すると予測している（32頁）。先進国の多国籍企業が将来，製造業活動中心からサービス活動中心へと転化していき，したがって海外からの果実も，利潤形態よりも技術特許料収入（経営サービス料も含めて）中心に変化していくとする予測は興味深い（生産的なものから寄生的なものへの転化）。留意しておきたいと思う。

短時間ではあったが，教授は懇切丁寧に様々な配慮と指示を与えてくれ，またみずからの研究成果を確信をもって話された。私が文章のなかで知った教授は，その手堅い実証的手法と既存の理論的成果にたいする偏りのない把握によって，大変堅実で誠実な学者であったが，現実の教授もその通りの人であった。日本から持っていった私の著作（『現代アメリカの貿易構造』杉本教授との共著，『アメリカ貿易の歴史的傾向』『山口経済研究叢書』12集，『アメリカ貿易の戦前構造』同14集）を献呈して辞去した。

ここでロンドンについての寸評。

ロンドン滞在中，ケンブリッジ，ロンドン両大学を訪ねた。おしなべて外からみるこの地の学生は，一様に質素な服装，寡黙できびきびした行動で，大変ひたむきな印象をうけた。とりわけ私がケンブリッジを訪ねた時は雨模様の天候で，途中から雪が降りだしたが，学生はカサもささず，ヤッケ風のコートをはおって，雪の中を自転車に乗って，黙々とカレッジの間を移動していた。その質素でひたむきな姿勢は，日頃見馴れているわが国の多くの学生との違いを感じさせた。

ロンドンの地下鉄は大変便利なもので，多く利用したが，もともと第二次大戦中，ロンドン空襲に備えて防空壕として掘ったものだそうで，大層深い。たいてい長いエスカレーターに乗って昇降するのだが（その長さは東京の地下鉄のエスカレーターよりもはるかに長い），その場合右側に一列になって乗り，左側をあけておかなければならない。というのは，その左側を，急ぐ連中が駈けあがったり，駈けおりたりするからである。そのようはまったく壮観である。ただこれだけなら何も珍しいことはないのだが，ロンドンの人々は平素は，いたってのんびりしているだけに不可思議である。地下鉄の乗場でも切符売場でも，けっして列を乱すことなく，自分の順番がくるまでいつまでも待っている。またそばに女性がいた場合には，その女性が乗るまではけっして自分から先に乗ろうとせず，少し混雑して他人の身体と

接触しそうだと，平気で次の電車を待つ。その礼儀正しく，落着いた様子は日本のラッシュに慣らされた我々には天国のようである。エスカレーターの順番をきちんと守っている，そののんびりした連中が，ひとたびエスカレーターに飛びのるや否や，左側のあいているステップを脱兎のごとく駈けあがり，駈けおりるのである。そのコントラストが大変面白かった。

地下鉄をおりて外にでると，ロンドンの街中は道幅があまり広くない。そのなかを大量の車が行き来している往来にでると，人々は老若男女を問わず，ほとんど信号を守らない。信号が赤であろうとなんであろうと，また横断歩道であろうとなかろうと，人々は渡れると判断したら平気で道路を横切る。これで交通事故が起こらないのが不思議と思うほど，それはすさまじい。地下鉄の路線は縦横に走っているが，歩道橋や地下道なるものにはついぞお目にかからなかった。どこでも好勝手に歩行者が急ぎ足で横切るので，歩道橋など作る必要がないのであろう。自動車の方もよくしたもので，前を急に横切られても，特別クラクションを鳴らすでもなく，また窓から顔をだして怒鳴るでもなく，平然としている。それどころか，時によると，近くに歩行者がいた場合には，わざわざ車を停め，窓から顔をだして歩行者に横断を勧めるほどである。

これほどせっかちで法規を守らない人々が，バス乗場で順番を待つ際には，きちんと一列に並んでいつまでも自分の番がくるのを静かに待っている。その行儀良さと落着いた様が上のあわただしさと対照的で実に興味深い。

(二)

次の目的地スイスのジュネーブに行く途中パリに立寄った。ソルボンヌの近くに宿をとった私は早速，大学に行ってみた。ケンブリッジやオックスフォードとちがい街中にあるパリ大学は，我々が通常ユニバーシティというものにたいして抱いているイメージとはかなり違っている（たとえば静かな郊外の一角の，グリーンを敷きつめたキャンパスの中に点在するいくつもの学部をもった大学といったイメージ)。学部単位に独立して繁華な街中のあちこちに置かれている様子は、ロンドン大学のそれに似ており，ソルボンヌとそれに続くカルチェラタンあたりは，ちょっとわが国の神田周辺を思わせる。週末でもあったためか学生は陽気に騒いでいた。

パリはともかく物が高い。旅行者にははなはだ居づらいところだ。一般の人にもそうだと思われる。したがって人々は猛烈な倹約をする。その倹約ぶりを紹介して

みよう。私が泊ったのは地下鉄 St. Michel の駅をおりてソルボンヌの方へなだらかな坂をのぼっていき，St. Germain 通りを越えて二筋ほどを左に折れた学生街の一角である。ここの屋根裏部屋からはノートルダムが見渡せる絶好の場所だったが，朝食つきで36フラン（1,800円）ほどだった。驚くべきはその宿の倹約ぶりである。少々微細にわたることを勘弁してもらうと，まず見晴しの良い屋根裏部屋まで重い荷物をひきあげるのだが，エレベーターがないので狭い螺旋階段をのぼらなければならない。その際，階段の手前でスイッチをおすとほの暗い電気がつくが，最上階にたどりつくやいなや消えてしまう。その間3分間ほどであろうか。荷物をおろして，さて用をたそうと廊下にでると暗闇の中にほたるの光ほどのほの暗いあかりがある。そこまで恐る恐る近づいてボタンを押すと廊下の電気がつく。これも3分ほどで消えてしまう。ようやくトイレに入るとこれが真暗闇。まわりをいくら手探りで捜してもスイッチらしいものは見当らない。さては故障中か，困ったわいと思いながらも，下のレセプションまで連絡におりていくのも面倒だから，暗闇の中で用をたそうと決心してドアのノブをしめ，それとは別の内鍵をまわすと，なんとトイレの電気がつく。内鍵とトイレの電気が連動しているのである。トイレットペーパーも質の悪いもの（わが国ではよく本のカバーや薬の包装に使ってある紙を想像してもらえばよい）が小さく切って折りたたんで箱の中に入っており，一枚ずつとりだす仕掛けになっている。シャワーを浴びようとするとこれまた電気がつかない。しかたがないので電話すると，「今から6分だけやるから，その間にシャワーを浴びろ、それ以上は駄目だ」とくる。大急ぎでシャワールームに飛びこむと，ようやく電気がつくといった調子である。おかげで，あわててシャワーを浴びたため，せっけんとシャンプーをそこに置き忘れてしまい，翌朝，気がついてとりにいったらもうなかった。そのため翌日からシャワーに入れなくなった。しかも無料だと思っていたシャワー代をばっちり請求された。以上のごとくである。

だが，これほどの倹約ぶりにもかかわらず，朝食はけっして悪いものではなかった。パンとチーズとティーだけというコンチネンタルだったが，毎朝，できたてのパンと熱いティーを好きなだけ食べ，飲むことができた。それに宿のマダムも口やかましかったが（暗闇の中で無断でシャワーを浴びているのをみつけて猛烈に怒鳴っているのをしばしば耳にした），よく気のつく人であれこれ教えてくれた。部屋も毎日きちんと掃除してあり，シーツもいつも真新しかった。その意味では倹約家ではあっても吝嗇家ではなく，手抜きはしてなかった。

パリが物が高いと思ったのは食事の時である。ごく普通のレストランに行っても

4～5千円はすぐ飛んでしまう。シャンゼリゼのカフェでのんだコーラが一杯14フラン(700円)もしたのには驚いた。また私はラーメンがどうしても食べたくなってオペラ座通りにある日本食堂に行ったが，そこのラーメンは800円で，それに日本茶を一杯飲んだら200円とられた。そんなわけで自衛手段として昼には crèpe という小麦粉をひきのばした薄い皮にチーズやバターをいれて焼いた，西洋風お好み焼といった感じのものを食べて飢えをしのいで，早々にパリを立去った。

つぎに訪問したスイスの Université de Genève はこぢんまりした静かな大学である(キャンパスも山口大学の三分の一ほどであろうか)。レマン湖にかかるモンブラン橋をわたってから川沿いの道をのぼり，しばらくして左手におれるとヌーブ広場にでる。その向うが大学である。学内の一角には宗教改革記念碑がたっていた。私が訪ねた Jean Ziegler 教授と，その助手の Andreas Frutiger 氏が所属する Faculté des Sciences Économiques et Sociales はその一番手前にあった。教授は『驚くべきスイス銀行』(Une Suisse au-dessus de tout soupçon) という邦訳書もあるわが国によく知られた学者である。私が本書に注目したのは，銀行，食品，製薬，時計，精密機械に代表されるスイスの巨大企業と銀行がスイス国内ばかりでなく，海外にもどのように進出しているかを明らかにしたことであり，その際アメリカとの間に一方では協調を他方では対抗をはらみながら行動している様子を，アメリカの impérialisme premier (一次帝国主義) にたいし，impérialisme secondaire (二次帝国主義) として規定していることである。戦後わが国においては発展した資本主義国の従属の問題は焦眉の課題として論争され，そしてある意味ではひとつの結着がついた問題でもあるが，それをヨーロッパで，しかもほかならぬスイスといった「中立，平和」をイメージとする国の研究者によって主張されたことは大変ユニークである。あいにく ziegler 教授は不在で，その助手である Frutiger 氏に会った。同氏は大変若く快活な研究者で，ジュネーブ大学の図書館を案内してくれたあと，以下のように私の質問に答えてくれた。

第一に，帝国主義の支配と侵略の直接の中心は，かつての植民地にたいする帝国主義国家から，今日多国籍企業へと変化してきている。そしてアメリカ (一次帝国主義) を先頭とする先進諸国＝スイス，日本，フランス，イギリス，西ドイツ等 (二次帝国主義) の多国籍企業は，みな等しく歩調を合わせて世界の共同支配のために行動している。この支配を行なうにあたって，L.D.C. において主要な補完物として行動しているのが現地の軍事独裁政権であり，先進諸国の多国籍企業は彼らを育成し，資本主義的文化様式の模倣化を通じてこの支配を一層強固なものにしようとし

ている。

ところで二次帝国主義は今日，自律的な支配権を樹立できるだけの強力な軍隊も金融手段もちあわせず，それができるのはひとり一次帝国主義だけである。したがって，周辺部にたいする共同支配のなかで二次帝国主義の一次帝国主義にたいする従属が強まり，両者の厳然たる格差が拡大する。以上のことは両者（一次帝国主義と二次帝国主義）の間に矛盾，対立，競争が存在することを否定しないが，しかし一次帝国主義は二次帝国主義の意志に反してみずからの意志をおしつけるだけの力を有し，また両者の機能上の同一性がその競争面に優先しており，対立，競争，矛盾にたいして互いに容認しうる限度を定めており，帝国主義の世界戦略の同一枠内で管理されるかぎり，世界支配体制を危機に陥れるものではなく，彼らの国際的な場での協調，妥協（サミット等）によって同一方向がとられるようになる。このように位置づけている。

高度に発展した資本主義国の，他の帝国主義国にたいする従属という問題はすでにレーニンによってその可能性が指摘されていたし，現実にも戦後のわが国の性格規定をめぐって広範に論議されてきた。その意味ではわが国の理論水準の高さと先駆性を一面では証明しているが，こうした考え方がヨーロッパのアカデミズムの中で提起されたのは極めて新しいことのようにみえたので，そのことを質問すると，Ziegler 教授のこうした考え方はスイス国内はもちろんのこと，ヨーロッパ全体でも極めて異例であり，支持者は少ないという答えがかえってきた。

第二にスイスの対外進出の特徴については，一部の特殊な企業（ネッスル，チバ＝ガイギー，ホフマン＝ラ・ロッシュ）と精密機械を除いては大きな産業はなく，製造業としての海外進出よりも利子生み資本形態での金融活動が中心的な活動である。利ざやかせぎ，金融的術策の国家としてのスイス，そしてスイスはそうした世界中の億万長者の租税租界地になっており，逃避資本と投機の国である。

第三に，多国籍企業が行動するにあたって今日作りあげている生産の世界的な統合，企業内世界分業の確立といった問題は，一部時計等の精密機械が東南アジアに生産拠点をもつ例はあるが，一般的に行なわれてはいないし，またヨーロッパ全域での分業体制の確立もない。それよりも主要な活動は上にのべたような投機である。

第四に，こうした多国籍企業の支配に反対する世界の人民の連帯と共同行動の展望に関しては，大変むずかしい問題なので即答することはできないと述べた。

そのあとは雑談的に Frutiger 氏が特に興味をもって研究している社会学や芸術の話をしたが，そのなかで氏は自分のワイフがベトナム人なのでアジアには特に興

味をもっているが，一口にアジアといってもけっして一様ではなく国によって事情が異なるし，またそのことが大変面白いと語った。また映画が好きでよくみるが，日本の溝口や黒沢は大好きだと述べ，しばし映画談義となった。私が日本の映画は今ではテレビにおされてあまり作られなくなったというと大変残念がっていた。私も映画が好きで学生時分よくみにいったので，その頃みたイタリアのデ・シーカ，ヴィスコンティ，フェリーニ，アントニオーニ，フランスのルネ・クレール，デュヴィヴィエ，カルネ，ルノワール，クレマン，クルーゾー，イギリスのデビッド・リーン，キャロル・リードなど思いだすままに名前をあげたら，貴方の趣味は大変良いが，少々古いといわれたのにはまいった。

スイス短評。スイスは湖の多いところで，いたるところに満々と水を湛えた美しい湖があり，そしてジュネーブ，チューリッヒ，ローザンヌ等々の都市がその湖畔に点在している。また私はスイスは山国だというイメージをもっていたが，雪を頂いたアルプスの連山を除いては，意外なほど平地なのには驚いた。もっともこの地の人々にはこれが山地なのかもしれないが，日本の山岳風景に見慣れているものにとっては，せいぜいのところ丘陵程度にしか映らなかった。ところどころ岩肌の露出している針のような尖頭をもった雪におおわれたアルプスの連山を遠く望みながら，なだらかな緑の丘陵地帯をぬって列車が行く。あるいは湖畔ぞいに町をぬけていく。その湖面に山々のシルエットが投影して，あるときは朝日にキラキラと輝き，そしてあるときは落日に燃えるその光景はまったくすばらしい。こんな光景を眺めたり，あるいはレーニンがロシア革命の直前に滞在し，日参していたというチューリッヒ湖畔のカフェ「オデオン」に腰かけて湖を眺めていると，Ziegler 教授の暴露した二次帝国主義のイメージとの違和感をどうしても拭い去ることができない。なるほど湖畔には自家用ボートの格納庫を持ち，湖から庭つづきに行ける宏壮な邸宅が並んでいる。それをみると確かにここは億万長者の逃避地のような感じをうける。だが人々は湖畔のベンチに腰かけてつつましやかな昼食をとり，陽光をあびて静かに憩っている。その落着きと静けさのなかに身をおいていると，二次帝国主義という言葉は不思議と消えてしまう。それほどにスイスの風光と環境は圧倒的だ。

(三)

第三の目的地キールまでのスイスからの旅は長い。私はできるだけ安く旅行するために，移動を全て鉄道で行なった。そのためなおさら長く感じる。早朝7時すぎ

にミュンヘンを出発したＩＣ特急（都市間急行といってドイツ内の主要都市を結ぶもので，TEE というヨーロッパ各国間を結ぶ超特急につぐ快速列車）は，4時すぎにハンブルクについた。所要時間8時間余。その間列車は時々，都市に停車する以外は一面に畑がつづく平野のなかを延々と走り続ける。その間820キロ。ヨーロッパの鉄道の旅はゆったりしたコンパートメントで日本のグリーン車以上に快適だが，それでも8時間も乗っているとどう時間をつぶしていいかわからなくなる。向いの婦人と英，独，仏それに手振り身振りをまじえて話してみたり，たまたま乗り合わせた日本人旅行者（ほとんどが学生風の若者）と情報交換したりしたところで，あまり時間がなくならない。それにも飽きてひとり窓外をみていても，あるのは緑の畑と点在するレンガ造りの家と小川と曲りくねった白い道だけである。日本と比べてなんと変化のない風景かと，今さらながら日本の入りくんだ海岸線，そそり立つ山脈，目もくらむ溪谷，そして小さく仕切られた水田が懐かしくなる。ヨーロッパ大陸は本当に平地ばかりである。

いったいにドイツの人々は気さくで親切だ。駅のホームで時刻表を睨んでいたり，街中で地図を開いていたり，地下鉄の駅で路線図をみていたりすると，きまってよってきて May I help you とか I can speak English とくる。顔つきも体つきもいかつく，大きいだけに，最初はなんとなく取っ付きにくかったが，慣れてくるとなんとなく愛敬さえ感じられる（人によってはこれをドイツ的な「共同体規制」と感じ，おせっかいなドイツ人というむきもあるようだ）。

キールまではハンブルクからさらに1時間半程かかる。ここは西ドイツの北端にあたり，そこからは北欧行きの連絡船が鉄道列車のホームに連結してでている。それをみて即座に青森を思いうかべた。北緯55度近くにあるキールはさすがに寒く（世界地図をとりだして比べてみたら，モスクワでさえ北緯56～7度である），あたり一面雪の中である。それまでヨーロッパの寒さに大分慣れていたつもりだったが，さすがにこの寒さはこたえた。おまけに駅前のインフォメーションで教えてもらったのがキール大学であったため（私自身もキール大学の附属施設なのでそのなかにあるものと錯覚していた），バスの停留所から4キロほど雪の中を歩かされてしまった。キール大学は大変大きな総合大学である。私のめざす Institut für Weltwirtschaft an der Universität kiel は大学とはまったく別の場所の，川べりに面した静かな一角に独立して建っていた。ここは研究施設と図書館機能に中心をおいており，館長とアジア関係の資料担当の Dr. Birkmeijer の両氏に案内してもらい，図書館を見学した。この図書館は全世界的な国際経済関係の一次資料と書籍の収集に努めて

[illegible]りわけアメリカと西欧に関するそれは立派である。蔵書一覧表 (Bibliographie der Wirtschafts-Wissenschaften) は 1968 年より大分のものが毎年発行されており，注文すればわが国でも入手可能であり，極めて整備されている。驚いたことにかなりの数の日本語の一次資料や文献も収集しており，担当の Dr. Birkmeijer は日本語も相当読め，私が贈与した三冊の著書のおもて書きを正確に解読した。なおこの私の三冊の著書は大変感謝され，世界各国の貿易関係の実証研究をできるかぎり収集したいので，大変良いものをもらったと言っていた。また氏は，スタッフ不足のため，一人でアジア 40 数ヵ国を担当しているので，とても十分な資料選択ができないとこぼしていたが，その口振りからはモンゴル語も読めるようだった。

そして日本の図書館も書店も大変良いと何度も念を押し，他のアジアの国々は本を注文してもこない場合がよくあるとこぼしていた。日本の本を選択する場合どんな基準で選ぶのかと質問すると，日本の国会図書館がだしている英文タイトルや書店のカタログをみて選ぶが，その際英文で書かれたものを優先しているが，特別の選択基準はないということだった。英文を優先するのは日本語はむずかしいので，利用できる人がほとんどいないからということだったが，にもかかわらず，日本文の書籍をかなり大量かつ系統的に揃えている努力には敬服した。またここの図書館のインデックスは著者別，タイトル別，国別の三種類にきっちりと整理されており，特に西ドイツやヨーロッパに関するものについては大変詳しく，また英文と独文の両方で表示されているため見易い。

私がこの研究所にきたもうひとつの目的は，この研究所が主催して毎年のように国際経済関係のシンポジウムを開催しており，そのひとつ The International Division of Labour　Problems and Perspectives (1974 年出版) を山口大学の同僚と目下輪読中であり，その内容に大変興味を覚えたのでぜひ関係者と話をしたかったからである。所長の Giersch 教授は不在だったが，Adlung, Wölter 両教授と話し合う機会に恵まれた。

Adlung 教授は髯 (あごひげ) をたくわえた長身の若々しい人で，大変懇切丁寧に説明してくれた。それによるとこうしたシンポジウムまたはカンファレンスはほとんど毎年のように開催しており，世界中の専門家を集める舞台設定とその成果を本にまとめて出版する仕事をこの研究所が行なっているということであった。そしてこれまで開かれたシンポジウムの目次を含むこの研究所がこれまで出版したものの一覧表と昨年開かれたカンファレンスに提出されたディスカッションペーパーを一

揃いもらった。特に後者は Intra-Industry Trade がテーマであり，前述の，われわれが目下山口大学で検討しているものに直接継続しており，大変興味をそそられた。

Wölter 教授との懇談は私の最近の研究課題である先進国間貿易，貿易と投資との関係といったことが中心議題でもあったため，3時間にもおよんでしまった（その原因は私の研究関心もさることながら，実際のところは教授の能弁，雄弁，熱弁に聞き惚れてしまったといったほうが適切であろう）。

第一に戦後の世界貿易の過半を構成している先進国間貿易について，ここで開催されているシンポジウムではそれを intra industry trade として位置づけ，分析しているが，この先進国間貿易が戦後何故貿易の主流となったのか，またその要因はなにかという点については，教授の回答は，それはひとつの理由だけからではなく，いくつかの理由によって説明できるものであるとして，比較生産費，ヘクシャー＝オリーン理論にはじまり，リンダーモデルや最近の技術格差論，プロダクトサイクル論に至る貿易理論の変遷をひとあたり説明して，それぞれがごく限定された範囲内での有効性，妥当性を有するものであると述べた。このように intra industry trade の必然性はこれまでの貿易理論の総合として説明できるが，ただしこれを実証的に証明することは大変むずかしい。特に国連の貿易統計では産業別コードが3ケタまでしかなく，そのため技術集約度や労働，資本集約度を正確にはかり，それを各産業別に分類しようとすると限界にぶちあたると述べた。この点は私自身も痛感しており，前述の自分の著者のなかではそれを克服しようとして，アメリカの貿易統計の産業別コードを7ケタまで調べ，それを自分の方法にもとづいて再分類し直したことを持参した拙著で説明し，これは Hufbauer のアメリカ貿易の実証の際にもないことだと述べると，それは立派な仕事であるが，一国ではできても国際的に統一してできないところが最大の悩みであると指摘された。

第二に，新しい貿易理論としてのプロダクトサイクル論の有効妥当性については，それを実証的に証明することは極めて困難である。たとえば製品ごとのライフサイクルを実証的に確定することはできないし，また Helleiner 教授も指摘しているように製品のライフサイクルに応じて貿易の流れが移動していくよりも，むしろ多国籍企業が必要と判断すれば，最初の段階からでも最新技術の移転が生じ，L.D.C から先進国に逆輸入される場合もある。そこで私がこの理論（＝プロダクトサイクル論）はむしろ多国籍企業の海外投資戦略として利用されているのではないかと述べると，教授もその通りであると答え，様々の段階の製品のライフサイクルに応じて多国籍企業が生産拠点を海外に移していく戦略として大いに利用されていると述べ

た。その意味ではこの理論の有効妥当性は極めて限定されたものである。

第三に，最近急速に拡大してきている多国籍企業の企業内取引 (intra-firm trade) については，それが爾余の貿易に与える影響はけっして少なくなく，Helleiner 教授もさかんにその重要性を指摘しているが，その通りであると思う。またその価格決定が恣意的なトランスファープライシングによっており，この問題を解明することは重要な課題である。ただ正常な free market における価格決定ではないので，その実態を解明することは困難であり，理論的にも証明しにくい。ただし，貿易全体ではまだそれほど大きくないし，また今後ともそれほど大きくなるとも思われないので，貿易全体に与える影響はさしてないと思われる。(この点では私自身の認識とはかなりかけ離れているので，さらに突っ込んだ論議をしたが教授の答えは同じであった)。

第四にこのように，戦後次々と新しい現象が現われ，またそれを説明するための新理論が出現した結果，伝統的な貿易理論はその有効妥当性を消失してきたのではないか，あるいはそれらを総合するものが必要となってきているのではないかと質問したところ，新しい貿易理論が出現しても旧来の理論がその全ての有効妥当性を失なったのではなく，それぞれが部分的な有効妥当性を有しているのだから，それで十分であるという考えを述べた。全てを説明できるような貿易理論の総合は必ずしも必要ではなく，それぞれの理論が部分的な有効妥当性を有しておればそれで十分であり，今後新しい現象が現われてもそれを説明できるような新理論を考えれば良いという考えであった。その意味では極めて楽観的であった。

第五に先進国からの対 L.D.C 貿易に関しては，比較優位の原理からいって，L.D.C の工業化の進展にともなって彼らが労働集約財を先進国に輸出するようになるのは避けられないことである。問題は自由貿易という原則にたって先進国の L.D.C にたいする輸出品目を転換させると同時に，L.D.C からの工業品の輸入を受けいれるべきである。そのためには先進国内の劣位部門の産業調整をスムースに行なうべきであると主張した。そこで，先進国内の産業調整はそう簡単に成功するようにも思えないがという私の質問にたいしては，西ドイツの例でも政府による企業家や労働者にたいする種々の助成金，援助，教育，訓練それに新しい産業計画の立案などの施策によって徐々に転換できており，問題は行政にあるとかなり楽観的な見通しを述べた。

第六に資本主義，社会主義を問わず現代は国を越えた生産統合が重要課題となってきており，特に東西間の経済協力が今後深まるように思われる。日本でも中国と

の経済協力が今後，急速に進むと思われるが，ヨーロッパにおける東西貿易や東西間の経済協力の行方はどうかと質したところ，ソヴィェトブロック内では東ドイツにしろチェコにしろ，むしろソ連よりも工業化の進んだ国があり，これらの国は西側との貿易や経済協力の強化を望んでいる。しかしソ連の強力な圧力があるためそれが実現できないでいる。西側としても隣接地域でもあるし，経済協力や貿易の拡大は望むところだが，ソ連との関係をぬきにしては困難であり，そうかといってソ連との間でだけやってみてもあまりメリットがない。いずれにせよかなりむずかしい問題である。

以上が教授との懇談の概要であるが，拙著の日本語をみながら，実は自分にも日本語の著書があるといって，日本の鉄鋼産業から依頼されて作成した西ドイツの鉄鋼業に関する分析報告書をみせてくれた。ただし日本語は全然読めないといって苦笑していた。

研究所を辞したのは夕刻5時すぎてであった。雪原に夕陽の落ちるすばらしい光景を，ハンブルクへむかう列車の中から眺めながら，私のヨーロッパ訪問も終りを告げたことを感じ，いくばくかの安堵と寂寥と名残り惜しさとそして満足感の入りまじった複雑な心境の中で異国の旅情をかみしめた。

(四)

私がこのヨーロッパ訪問中，たえず考えつづけてきたことは二つある。ひとつは私が経済学に志すきっかけになり，そして今日に至るまでたえず考えつづけてきた国民経済 (national economy) と国際経済 (international economy)，それに世界経済 (world economy) の関係であり，もうひとつは恐らくこの地を訪問する日本人の誰もが考えるであろう西洋と東洋との違いである。

イギリスは別にして，ヨーロッパ大陸は国境を画然と画さなければならない天然自然の障害が特にあるようにも思われない（もちろん，アルプス等のいくつかの例外はあるが)。そのほとんどは平地である。また人種的にも言語上でも種々雑多に入りこんでおり，その点からも国境を分けなければならない理由がない。作られたのは長い間の歴史的経過のなかで形成された人為的な国境だけである。その意味では島国で周囲を海によって隔てられたわが国が，その自然条件によっておのずと国境を画さざるをえなかったのとは事情が異なる。(同じ島国のイギリスでも，自分たちをスコットランド人とかウェールズ人とか呼んで，けっしてイギリス人とはいわない

ことを旅先でよく聞いた。ちょうど明治維新前のわが国の人々が，みずからを長州人とか薩摩人とか名のって，日本人といわなかったのと同様に。）しかもこの人為的に画された国境の中で数千年の歴史の間，征服と侵略を繰返し，ある時の加害者が別の時点の被害者にかわり，人々は移動し合い，混じり合い，国が作られては消え，消えては作られ，国境線が移動して今日にいたっている。そして人々はこの人為的に作られた国境線を越えて交流し合い，まるで隣村へ行くような気安さで週末を他国で楽しむ。つまり地域間の交流が国内の交流にさきだって，あるいはそれとならんで存在しているということである。

にもかかわらず人為的にしかれた国境線はそれによって一つの政治体制と経済体制を画する。つまり，民族国家（単一民族国家であれ，多民族国家であれ）と国民経済の形成を刻印し，国家による一応の総括が行なわれる。だからこの国民経済の形成は国民経済相互間の関係，つまり国際経済を当然に予想し，逆にまた国際経済は国民経済を必然的に前提としている。両者には密接不可分な相互連関がある。そしてこの国際経済の全体が一つの世界を小宇宙を形づくる。これにたいしわが国においては，国民経済は国際経済を抜きにして自然条件によって制限された孤立的なものとして現われ，その国民経済そのものが一つの世界を小宇宙を形成している。つまり，私にとっては国際経済とは同質の国民経済相互間の連間，交流であり，世界経済とはそれらを含む異質な諸世界の総体であるように思われる。そして西洋世界と東洋世界が接して総体としての，地球大での世界経済を最終的に作りあげるとしたら，ヨーロッパのなかには確かに国民経済，国際経済，世界経済の三大範疇とその相互作用が存在するが，わが国の場合には国民経済と世界経済はありえても，それらの中間項である国際経済は到底存在しえないものとしてしか私には映らない。ヨーロッパにおけるこの国民経済の基礎にあるのは市民社会である。市民社会の強固さについてはよくいわれているところである。私自身もこの旅行の間，ヨーロッパ社会の落着きと安定そしてその蓄積の深さをあちこちで見聞し，改めて市民社会の強靱さに驚いた。しかもそれが何世紀にもわたる試錬をへて息づき，ヨーロッパ大陸規模での諸国民の相互作用の中でしっかりと定着していることに感嘆した。だからヨーロッパは市民社会を共通母体にしてそれぞれを民族国家として画し，国民経済を形成しながら，これら同質の国民経済は国際経済として，諸国民経済の複合体として相互に連関し合っている。ここにこそヨーロッパ社会の伝統とその先進性と強靱さの秘密があるのではないだろうか。つまり市民社会が成長の中核であり，ヨーロッパ大でのその相互交流が成長の促進剤であり濾過器であったといえないだ

ろうか。

だがこのような伝統と強さにもかかわらず，私はそこにひとつの限界をみつけずにはいられない。というのは彼らのインターナショナリズムは同質のヨーロッパ世界のものであって，異質な東洋世界を包含した真のグローバリズムではありえないからである。彼らの目には，東洋は先進的な西洋文明を教化していく対象ではありえても，そこから学ぶべき多くのものをもつものとしては到底映りえない。そこに「白人の責務」をみいだす彼らの「文明史観」なるものに私はどうしても馴染めない。そしてそれが「資本の文明化作用」のもつ限界であると断じたら穿ちすぎているだろうか。あたかもギリシャの民主制が無数の奴隷の無権利のうえになりたっていたように，彼らのインターナショナリズムが異質な東洋世界を無視したところでなりたっているとしたら，どんなに優秀なものであってもおのずとひとつの限界を有し，時代とともにその生命を終えざるをえないだろう。

いずれにせよ市民社会を中核とし民族国家達成を契機として国内市場を統一し，国民経済を形成した西欧資本主義は同質のヨーロッパ大でのインターナショナルな相互交流を通じて大きな発展をとげた。そしてこの「資本の文明化作用」はまず同質の社会をみずからの手で移植した「本来的植民地」(新大陸) に拡散し，ついでアジア・アフリカの未開社会を植民地主義的に侵略することによってさらに波及していった。あるいはまた伝統的に西洋と東洋の接する陸つづきの地に徐々にしみこんでいった。残念ながら日本はこのどの範疇にも属さない。資本主義世界市場成立の最後の一片として，かろうじて世界市場に組みこまれた日本は唯一の独立国として，しかも東洋にとってまったく異質な資本主義の道を歩む。私のヨーロッパへの旅は，東洋と西洋の異質性をいやがうえにも認識せざるをえなかった。こんな異質な土壌のうえに資本主義制度が形成されている不可思議さを改めて痛感した。と同時に，こんな異質な土壌のうえに資本主義を接木した明治の先人の模倣力に驚嘆した。

それと同時に，ヨーロッパの安定性と重厚な伝統はわれわれにとって確かに魅力ではあるが，そこに若々しい成長のダイナミズムとコスモポリタニズムは感じられなかった。世界には今やヨーロッパよりもはるかに高いスピードで成長をとげている多くの国々がある（資本主義，社会主義を問わず)。それらと比べてみた場合，資本主義の母国ヨーロッパの停滞は誰の目にも明らかである。だが我々の側にどんなに若々しい成長のダイナミズムがあろうと，ヨーロッパの市民社会とインターナショナリズムが達成した地平を越える新たな質の社会とグローバリズム——つまり新しい原理——が確立されないかぎり，われわれの西洋への密かな精神的回帰もま

たなくならないだろう。そしてそれはすでに歴史的使命を終えつつある旧社会の遺物にいつまでも世界が支配されることにもなる。そんな感慨に浸っているあいだに飛行機はイルミネーションが闇の中に浮きでたようにまぶしい成田空港におりたった。そこは一ヵ月ぶりの日本であった。　(昭和54年3月31日稿)

〈追記〉

この原稿は帰国直後の3月末に書いたものである。1ヵ月たった現在読み返してみると，鮮烈な印象とともにある程度の興奮状態が読みとれる。ここに書いてあることは私の経験した実感をもとにしたものであって，経済学に必要な抽象化や統計資料の検討をもとにした平均化を経たものではない。帰国直後の生々しい印象をもとにして，興奮状態のなかで書きあげたものである。その点を頭にいれて読み流していただければ幸いである。

(昭和54年5月1日記)